日本医史学雑誌　第66巻第4号（2020）　359–374

華岡青洲編『産科瑣言』諸写本の書誌とその内容の研究

松木　明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：令和2年3月30日／受理：令和2年10月16日

要旨：『産科瑣言』は華岡青洲の産科に関する唯一の編述である．従来の研究ではその内容が十分に解明されていなかった．著者は20本の『産科瑣言』の写本を調査して，その内容は分娩前後の合併症に対する140方前後の処方の記述が中心であることを見いだした．したがって本書は一般の産科学の教科書ではなく，賀川玄悦の『産論』において処方が適切に使用されていないことを指摘するために青洲が編集した著述であることが判明した．管見では1824年に書写された写本が最も古い．20本の写本間では特記するほどの異同は認められない．本書の成立年代の特定と1824年以前の写本の発見が今後の研究の焦点である．

キーワード：華岡青洲，『産科瑣言』，賀川玄悦，『産論』，処方

はじめに

華岡青洲（以下「青洲」）は春林軒に入門し修業を終えた門人に対して「免状」を与えた．修業期間は必ずしも一定したものではなかった．短ければ数ヵ月，長ければ10年以上に及ぶ場合もあった．呉 秀三は1923年に出版したその著『華岡青洲先生及其外科』の中で青洲が1815年に稲川梁策に与えた「免状」を紹介している[1]（図1）．教授した科目は「内外治法」，「金創治法」，「産科奥術」，そして「整骨術」であった．分かりやすく云うと「内外治法」は内科と外科の診断と治療法，「金創治法」は外傷の治療法，「産科奥術」は産科の処置法，そして「整骨術」は脱臼・骨折の整復・固定法ということになろう．

青洲はこれらの科目を口述したのであるが，それぞれの科目が時間的にどれ位の割合で教授されたかについては全く明らかにされていない．青洲

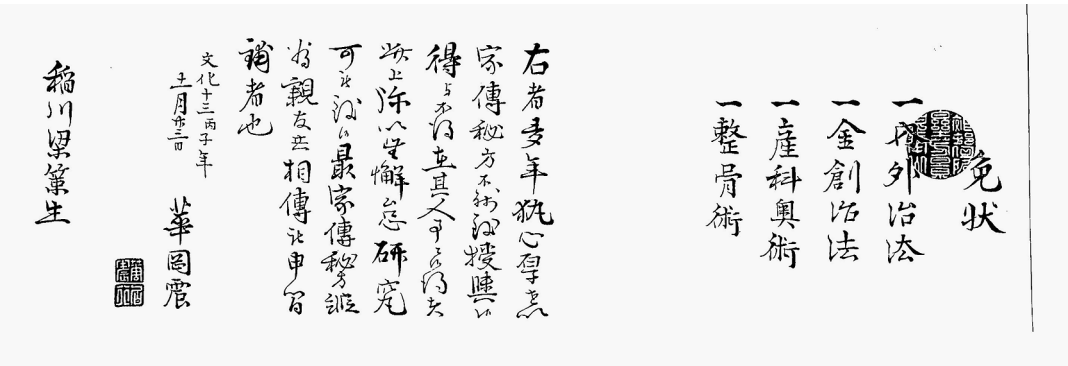

図1

の口述内容の一部は門人が筆録した写本によって窺い知ることが出来る．これらの写本の題名は佐藤持敬が1861年に編集した『華岡氏遺書目録』によって明らかである[2]．この目録は当初佐藤が収載した59種の他に，1923年に呉が補充した13種が含まれている．計72種には青洲以外によって著された著述も含まれているが，それらを含めても産科関係の著述はわずかに『産科瑣言』1冊だけである．『婦人抜萃』，『鎖陰治法記』の書名も披見されるが，この2冊は婦人科関係の書であって産科関係の著述ではない．このことは青洲の産科に関する口述の内容は『産科瑣言』一冊に集約されているといっても誤ってはいないであろう．

青洲の業の湮滅を懼れた高弟本間玄調（以下「玄調」）は青洲による撰述の写本を収集し，その中から後世に残すべき書目23種を1850年に選定した．実質的編者の小林定誠が誤って『奇方記聞』と『貼薬方攷』を欠いた目録を玄調に示したので，玄調は都合「二十一種」と誤解し，選定した著述を『春林軒二十一種』（全15集）と題した．本来であれば『春林軒二十三種』となるべきであった[3]．これらは玄調が認めた青洲の主著である．その第4集に『産科瑣言』が含まれている．このことは『産科瑣言』が青洲の重要な著述の一つであると評価されたことを意味する．このように『産科瑣言』は青洲が門人に教授した科目の中，そして青洲の著述の中で主要な位置を占めているにも拘わらず，その詳細については十分明らかにされておらず，これまでの諸家による本著述に対する記述，評価も適切ではなかった．今回，著者は『産科瑣言』の写本20本を調査して従来知られていなかった新知見を得たので報告する．

1.『産科瑣言』に関する先行研究

青洲の事績に関する本格的研究が始まったのは上述したように1923年の呉の研究以来であるから，凡そ100年になろうとしている．この間，多数の論考が発表されてきたにも拘わらず，研究の基礎となるべき青洲の著述に関しては基本的な事項でさえ十分に闡明にされていないのが実状である[4]．

『産科瑣言』の書名は仁井田好古が1835年12月に撰した「華岡青洲墓誌銘」に「著す所，瘍科瑣言，産科瑣言，瘍科神書，疔瘡辨明，乳岩辨，天刑秘録，傷寒講義など凡そ二十七種．皆その治術の大意を云う．」（原漢文）[5]とあって，具体的に示した7種の書名中二番目に挙げられているが，詳しい説明はない．これが『産科瑣言』の題名が見られる最も古い資料である．前述したように1850年，玄調は青洲の著述の善本を選んで『春林軒二十一種』を撰した．その第4集に『産科瑣言』を収載した．このことは本書が青洲の著述の中で高く評価されたことを示す[6]．その翌年の1851年に著された浅田宗伯の『皇国名医伝』にも青洲の伝が略述されているが，末尾に青洲の著書13種を示し，『産科瑣言』を二番目に掲げている[7]．浅田の記述は仁井田の撰した墓誌銘に準拠しているから当然詳しい説明はない．

1861年，春林軒の門人佐藤持敬は青洲の著述が書写の繰り返しによって混乱し「異名同書」，「同名異書」の状態になっているとして，青洲一門の著述59種の題名を記した目録をつくった．『華岡氏遺書目録』である．後に呉はこれに13種を補った．佐藤がどのような順序で書目を記載したのか不詳であるが，3番目に『産科瑣言』の名がある．書名のみで詳しい説明はない[2]．1895年に増田知正，富士川 游，呉 秀三らは『日本産科叢書』を選集校正し，その第五十一に呉の所蔵する写本『産科瑣言』を収載した．しかし，詳しい解説もなく，しかもこの写本は「産後不語」までしか記述されておらず，それ以降の十数項目が欠落しているという不完全なものであった[8]．呉 秀三は前記の『華岡青洲先生及其外科』の中で青洲の助産術に言及している．記述は門人廣田 泌の『廣田泌撰見聞録』から引用して，横産と産時裂傷による膣の瘢痕的閉鎖について記述したものであるが，『産科瑣言』自体については何も言及するところがない[9]．1919年 緒方正清は大著『日本産科学史』を上梓し，その中で青洲の産科学を取り上げ『産科瑣言』に及んでいる[10]．しかし，『産科瑣言』についての記述は不十分と云わざるを得ない．緒方は次のように記している．

助産術の如きも，亦優に一家を成したる者の如く其口述に係る産科手術口伝なる者あり．支那の産書と賀川の産論とに依りて別に見地を立つ．其産科瑣言の如き，亦頗る親切にして所論肯綮に中る者多し．

以上のように述べて『産科瑣言』の冒頭の「総論」の一部を引用し，賀川の助産学は種々の手技に関しては古今未発の説が多く学ぶべき点が多いが，処方の使い方に関しては「其の方法の如きは，疎漏にして病症に適せざる者多し．之を以て諸方書中の方を選び類を分ち示す．」とした．これは青洲の言葉の引用であり，『産科瑣言』が処方集であることを述べたものである．そして緒方は「知妊娠法」から「産前下痢」に分けてその適症を示し，「臨産」以下「産後不語」などは附録として「臨床的要領を掲げたもの」とした．『産科瑣言』は上述したように各項目，つまり妊娠から産後に至る時期に見られる合併症に対する適切な処方を示したものであり，諸合併症の診断，症状，治療上の手技を論じた書ではない．緒方が用いた『産科瑣言』の写本は不詳であるが，「臨産」以下数十項目を「附録」とする解釈は誤りである．著者（松木）が閲覧したほとんどの写本において「附録」が認められるのは「胎中瘧（疾）」，「臨産」，そして末尾の「産後腸癰」の項目だけである．したがって緒方の「臨産」以下数十項目を附録とする解釈は甚だ不適切であると云わざるを得ない．

緒方に続いて青洲の事績について詳しく研究した関場不二彦は1933年の『西医学東漸史話』の中で青洲の著述に関して，『瘍科瑣言』，『瘍科神書』（『金創秘話』），『灯下医談』，『瘍科辨略』，『留熱（「塾」の誤り）漫録』などを示して簡単な解説を付しているが，それらの中で『産科瑣言』は欠落している[11]．1964年に発行された『明治前日本医学史』第4巻に梶 完次の「明治前日本産婦人科史」が収載されたが，青洲の『産科瑣言』に関してはわずか一行「『産科瑣言』，著作年月不詳写本の儘伝はる，一汎の産科書にして自己の意見を賀川の産術に加えたもの．」とあるのみである[12]．『産科瑣言』は決して「一汎（一般）の産科書」ではなく．青洲が云うように「諸方書中の方を選び，類を分けた」書である．梶の評価は適切ではない．

『産科瑣言』は1980年に『近世漢方医学書集成　華岡青洲（一）』に覆刻収載されることになった[13]．解題を執筆したのは宗田 一で，底本としたのは宗田の所蔵する一本であった[14]．しかし，この写本は書写年が不詳で，しかも春林軒門人録にも披見されない「松川安底正昭」なる人物によって書写された一本で，これを善本として採用した理由を説明していない．宗田は解題の冒頭で「青洲は賀川流産科の術について独創性を認め臨床的価値を済生の術と評価しているものの，薬方の選択は疎漏で証の合わぬものが多いと批判し，薬方を別個に選択している．」と記したが，これは先に引用した青洲の言葉を現代文に翻訳したものに過ぎない．これに続く解説も青洲の二，三の言を抄出引用するだけで，書誌的事項も含めて『産科瑣言』全体に対する解題は的の外れたものである．宗田以降，『産科瑣言』に関する見るべき研究は皆無である．

以上述べてきたように『産科瑣言』は青洲の主著の一つとして評価されてきたものの，その完成時期や写本の系統などの書誌学的事項，内容の検討，青洲の事績全体における位置などについてはほとんど研究されてこなかったとしても過言ではない．

2. 研究対象とした諸写本の書誌

本稿において著者が研究対象とした『産科瑣言』の写本は表1に示したように20本である．いずれも直接閲覧したか，インターネット上で全丁の閲覧が可能であった写本である．現在，新日本古典籍総合データベース[15]で『産科瑣言』は22本，異名同書の『胎産瑣言』は4本検索可能である．したがって現在所在が確認されている過半の写本を閲覧したことになる．新日本古典籍総合データベース[15]によって検索可能で，かつ著者未見の写本はいずれも書写年不詳である．著者は以上の20本の他に，複数の個人が所蔵する『産科瑣言』（内題）の写本12本，『胎産瑣言』の写本

表1 調査した「産科瑣言」諸写本の書誌

番号	略称	所蔵施設（者）	請求番号	外題	内題	丁数	書写者	書写年	その他
1	二十一	武田科学振興財団杏雨書屋	杏 3169-4	産科瑣言	産科瑣言	62	不詳	1850頃	
2	富士川	京都大学附属図書館富士川文庫	サ-90	産科瑣言	産科瑣言華岡先生口授	53	不詳	不詳	
3	宗田	国際日本文化研究センター	SC/857/Ha	産科瑣言	産科瑣言	61	松川安底正昭	不詳	松川は門人でない
4	国会	国立国会図書館	244-232	産科瑣言	産科瑣言	56	不詳	不詳	他書と合冊
5	神 1	神戸大学社会科学系図書館	砂治文庫サ-7	産科瑣言	産科瑣言	37	不詳	1854	
6	神 2	神戸大学社会科学系図書館	砂治文庫サ-8	産科瑣言	産科瑣言	46	不詳	不詳	
7	神 3	神戸大学医学部図書館	和辻文庫 Wa-145	なし	産科瑣言抜萃	31	源之熙	不詳	「導水瑣言」などと合冊
8	千葉1	千葉大学図書館亥鼻分館	81872	産科瑣言	産科瑣言	49	小田健	不詳	
9	千葉2	千葉大学図書館亥鼻分館	81341	胎産瑣言	胎産瑣言	32	不詳	不詳	
10	くす1	内藤記念くすり博物館	60379	産科瑣言	産科瑣言	58	深味正記	1848	
11	くす2	内藤記念くすり博物館	34250	産科瑣言	産科瑣言	48	不詳	不詳	
12	くす3	内藤記念くすり博物館	35938	青洲先生産科瑣言	産科瑣言	19	不詳	不詳	
13	くす4	内藤記念くすり博物館	35989	産科瑣言	産科瑣言	49	岩井□文，後藤希玄	1824	他書と合冊
14	くす5	内藤記念くすり博物館	30995	青洲先生口授胎産瑣言	胎産瑣言	41	国富玄洞	不詳	他書と合冊
15	名古	名古屋大学図書館 医学部分館	495（中西 139）	なし	産科瑣言	42	不詳	不詳	
16	研医	研医会図書館	2674	産科瑣言	産科瑣言	44	不詳	不詳	
17	高橋1	高橋　均氏		青洲産科瑣言	青洲先生産科瑣言	32	不詳	不詳	
18	高橋2	高橋　均氏		なし	産科瑣言	19	不詳	不詳	
19	高橋3	高橋　均氏		なし	産科瑣言	38	不詳	不詳	
20	産科	呉　秀三旧蔵，日本産科叢書に復刻		産科瑣言	不詳	不詳	不詳	不詳	

注：□は擦れにより判読不明の字.

1本を閲覧した．これらの13本は非公開であることに加えて，すべて書写者，書写年が明らかでなく，これらから得られた知見は著者が閲覧した上記の20本の写本から得られた結論と齟齬する点が何ら認められないので，ここでは研究対象から除外した．

20本の写本について内題を見ると18本は『産科瑣言』で，これには『青洲先生産科瑣言』を含む．残りの2本が『胎産瑣言』であった．管見では『胎産瑣言』以外の「異名同書」は知られていない．以下諸写本名についてはスペースを節約するために表1の冒頭に示した番号のみで表記する．但し1番は基本となる写本であるから「1番二十一種本」とする．書写年が明記されているのは13番の1824年，10番の1848年と5番の1854年の3本のみである．1番二十一種本は玄調が底本とした写本を1850年に書写した一本であるが，この底本がいつ書写されたか不明であるので1850年頃とした．1805年の書写とされる7番については次節で詳述する．15番は所蔵施設の過去の解説文に1800年書写とあったが，識語は記述されておらず，本文中に1800年を実証する記述もない．現在その解説文は削除されている．なおこれ以降，本稿で論じている著述を一般的にいう場合は『産科瑣言』と表現するが，個々の写本についてはこの限りではない．

3.『産科瑣言』の成立年代

現在のところ最も古い書写とされるのは7番であるので詳しく述べる．全102丁であるが，1丁～32丁までが「産科瑣言抜萃」，33丁～58丁までが「升消平胃散」で始まる題名のない処方集，59丁～63丁は「篠崎三徹小児治方」，そして64丁と65丁は源之熙の「導水瑣言序」，65丁～102丁が和田東郭の『導水瑣言』である．つまり合冊であるが，全丁の書体は同筆と考えられる．「産科瑣言抜萃」，「升消平胃散」，「篠崎三徹小児治方」は処方集である．いずれにも識語はない．しかし，次の源之熙の「導水瑣言序」の末尾65丁裏に「文化二年九月　椿亭源之熙撰并書」とある．これに続いて和田東郭の『導水瑣言』が書写されている．このことから源之熙が『導水瑣言』の書写を開始したのは1805年（文化二年）9月であり，これより前の丁として綴じられている「産科瑣言抜萃」などは1805年9月以前に書写された可能性がある．しかし，断定は出来ない．「産科瑣言抜萃」の末尾に識語が書かれていないからである．断定出来ないもう一つの理由は，「産科瑣言抜萃」とありながら見出しとして示されている処方数だけでも152方と多いことである．一般に処方集ないしは処方を多く収載する写本は後年の書写になるほど処方数が大幅に増えるのが一般的である．例えば，処方集の一つである青洲の『青嚢秘録』は書写された年代が降るにしたがって収載処方数は大幅に増えていることによってこのことは容易に了解されるであろう[16]．

収載処方集数について見ると，玄調が撰した1番二十一種本の処方数は140方，2番の処方数は141方，3番の処方数は137であり，1824年書写の13番の処方数は131である．このことを考慮すると，7番の「産科瑣言抜萃」収載の処方数が抜粋本であるにも拘わらず152方とこれらの写本の処方数より少し多く，ほぼ同一時期ないしそれよりも後年の写本であることを示唆するものであり，その原本が1805年9月以前に成立していたとは俄に考えられない．いずれにせよ，これまで確認出来た最も古い写本は13番で，1824年までに『産科瑣言』は間違いなく成立していたといえる．青洲の他の著述，例えば『瘍科神書』，『瘍科瑣言』などには『産科瑣言』の題名は披見されない．今後，1824年より古い書写の年紀を有する写本の発見が重要な課題となろう．

4.『産科瑣言』の内容

『産科瑣言』の目録（項目）を1番二十一種本にしたがって一括して表2に示した．参考のため『近世漢方医学書集成　華岡青洲（一）』にも収載されて容易に閲覧可能な3番の目録もその右に示した．項目に関して両写本は同じである．各項目の右の数字はその項目中で示されている処方数である．本書は青洲自身が冒頭の「総論」（写本によっては「統論」とあるが，書写時の誤記であろ

表2　1の二十一種本と3の宗田本の各項目に披見される処方数（内容が示されている処方名のみを対象．順序は右へ，そして次行へ）

	二十一種本	宗田本		二十一種本	宗田本		二十一種本	宗田本
総論見出し欠	0	0	知妊娠法	0	0	安胎	4	4
悪阻	7	7	胎動	3	3	養胎	9	9
胎痛	1	1	胎漏	3	3	子淋	2	1
転胞	1	欠	遺尿	0	1	大便閉	1	1
二便閉目録に欠	2	2	子淋（種）	7	5	小便閉本文に欠	欠	欠
子煩	3	3	子懸	0	0	子癇	3	2
子咳	2	2	産前下利	1	1	胎中痢疾	5	5
子痔（痞）	0	0	胎中傷寒	1	1	胎中瘧疾	2	2
附録	0	0	臨産	2	2	附録	1	1
攣胎	0	0	坐産	0	0	横産	1	1
碍産	0	0	偏側	1	1	産后	2	2
胞衣（不下）	1	1	盤腸	0	0	陰脱	0	0
子宮脱	0	0	血暈	13	14	傷産	0	0
振慓	2	2	瘀露	2	2	児枕痛　心腹　痛腰痛　小腹痛	3	3
産後寒熱	1	1	驚悸怔忡	4	4	産后不語	2	2
産後耳鳴	1	1	産後虚汗	4	4	産後中風	2	2
産後嘔吐	6	6	痢疾	2	2	水腫	8	8
女麹本文欠	欠	欠	医按	0	0	頭痛	3	3
産後咳嗽	3	3	崩血	2	2	帯下	11	11
褥労	3	3	産後腸癰	1	1	附録	2	2
						計	140	137

う）において，産科関連の適切な処方は『傷寒論』，『金匱要略』には乏しく，『婦人大全良方』，『千金要方』，『外台秘要』，『医学入門』などの諸書から裨益する処方を抜粋して記すものであるとし，その末尾に「賀川氏産論ノ如キニハ，術ニ於テハ古今未発ノ説多シ．因テ随ヒ用ヒテ可也．其ノ方法ノ如キハ未（「疎」の誤記）漏ニシテ，症ニ摘セラ（「適セサ」の誤記）ル者多シ．是ヲ以テ諸方書中ノ方ヲ選ヒ類ヲ分テ亦（「示」の誤記）ス事左ノ如シ．」（句読点－松木）と記している．妊娠，分娩，産後の各時期における合併症に対する処方を諸書から摘録したものであることが分かる．したがって本書はこれまで諸家によって称されてきた「一般の産科書」でないことは明らかである．このことは同時代の奥劣齋の『産科内術』[17]や立野龍貞の『産科新論』（1819）[18]には手技的記述が多く記述されていることによっても理解されよう．このことが従来の研究では明確に指摘されてこなかった．上述したように『産科瑣言』は賀川玄悦の『産論』の処方使用の不適を指摘した著述であるから，記述の項目も『産論』に近似したものである．例えば「産後」の項目について1番二十一種本と『産論』の病候を比較したのが表3である．両書に共通する項目が多いことを了解されるであろう．

研究対象とした20本の写本において，目録，つまり見出しの項目がどのようになっているかを示したのが表4である．1番二十一種本を基準として，同主旨の内容が記述されていれば「同じである」すなわち「○」とした．もちろん，写本間で多少の字句の異同，収載処方数と処方内容の違いも認められるが，それは書写時の誤記，書写の繰り返しに起因するものと解したい．20本の写本を通覧すると，7番は抜粋したものであるから除外して，12番と20番は後半部分が欠落した不完全な写本であることが分かる．これらの3本以外の17本はそれぞれの項目の収載処方数に多少の異同は認められるものの，基本的に同じ内容であることが理解される．12番と20番の写本の前半の部分は7番の抜粋本以外の諸写本と項目は一致し

表3　二十一種本の「産后」以下の目録と「産論」の産後の病候（順序は右へ，そして次行へ）

二十一種本		産　論	
胞衣（不下）	盤腸	胞衣不下血暈	不起血暈
陰脱	子宮脱	癲狂	譫語発班
血暈	傷産	寒戦咬牙	血暈
振慓	瘀露	崩漏	瘀血不下
児枕痛　心腹 痛腰痛　小腹痛	産後寒熱	児枕痛	胞衣不下
驚悸怔忡	産后不語	発熱煩渇	虚汗不止自汗盗汗
産後耳鳴	産後虚汗	遍身痛有熱疼痛	両脇痛腹痛
産後中風	産後嘔吐	臍下急痛	痿躄
痢疾	水腫	小便不通	乳少或止
女麹本文欠	医按	産門不閉	肛門脱
頭痛	産後咳嗽	泄泻腫満	便閉
崩血	帯下	水腫	頭痛
褥労	産後腸癰	怔忡	経行発狂
附録		癒癍	喘息
		搐溺上竄	中風傷寒
		腹満	不語

ており，何らかの理由で後半の書写が中断されたものであろう．内題が『胎産瑣言』である9番と14番の項目は『産科瑣言』の内題の諸写本のそれらと変わるところはない．

諸写本の内容が近似していることを具体的に示すために，項目中最も多くの処方を記述している「血暈」に披見される処方名と生薬数を示したのが表5である．一覧して各写本の「血暈」中の処方の味数は殆ど一致していることがわかる．もちろん1～2味の違いは認められるものの，それは書写時の誤りに起因するものと見做しても大過はない．14番の「補虚湯」が13味と他の写本がすべて6味であるのに比較して極端に多い．その理由は不明であるが，恐らく書写時の誤記に起因すると考えられる．以上述べたように『産科瑣言』は『青嚢秘録』[16]，『瘍科瑣言』[19] と比較すると写本間の差異が小さいということが出来る．このことが何を意味するかは即断出来ないものの，本書が処方に焦点を合わせたものであるという以外に，青洲の産科に関連した口述の回数が外科や金創（外傷）関連のそれに比較して少なかったこともその理由の一つであろうと推察する．このことは産科関係の写本が「産科瑣言」一著だけであることによっても傍証される．なお『産科瑣言』の内容が処方中心であることは再三述べてきたが，産科的事項に対する青洲自身の見解が述べられていない訳ではない．このことについては7節の「賀川の『死胎八則』に対する青洲の見解」において詳述する．

5.『青洲医談』中の産科関連の記述と『産科瑣言』

『青洲医談』は青洲の口述を筆録したもので『春林軒二十一種』(5，6集）にも収載されており，青洲の医学，医哲学を伝える重要な史料である．その成立は遅くても1816年頃と目され，当初から複数巻の書冊として存在したことは間違いないが，玄調は1850年に『春林軒二十一種』を編纂するに際して4巻にまとめた．この4巻本の「巻之三」は別に『灯下医談』の前篇，「巻之二」は『灯下医談』の後篇として後年流布した．これらは「異名同書」である．現在多く披見される1巻本の『青洲医談』は4巻本の『青洲医談』から抄出したものである[20]．断定はできないものの，『青洲医談』の各巻はそれぞれ異なった時期における青洲の口述をまとめたものと考えられる．このことは同じ内容を含む産科関連の記述が「巻之一」，「巻之二」，「巻之四」に披見されるからである．ある年度に産科だけを集中的に口述したとは考えられない．「巻之三」は外科疾患を解説した

表4 「産科瑣言」写本の目次の比較（二十一種本の目次を基準とした．○は二十一本と同じ語句）

番号 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
総論見出欠	○	○	統論	○	○	欠	○	統論	統論	統論	見出し欠	統論	統論	○	総論	○	○	○	統論
知妊娠法	○	知妊娠方	○	○	○（方）	欠	○	欠	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○（方）	○
安胎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
悪阻	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
胎動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○順序前後	○	○	○	○
養胎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
胎痛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
胎漏	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○
子淋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
転胞	欠	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○
遺尿	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大便閉	○	○	○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二便閉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子淋（腫）	○	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	○	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫	子腫
小便閉本文欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠
子煩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子懸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子癎	○	○	後出	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子咳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
産前下利	○	○	○	附録 欠	附録 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
胎中痢疾	○	○	○	欠	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子痔（瘖）	子瘖	○	子瘖	欠	欠	子瘖	子瘖	子瘖	子瘖	欠	子瘖	子瘖	子瘖	子瘖	子癎	○	子瘖	子瘖	子瘖
胎中傷寒	○	○	○	欠	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
胎中瘧疾	胎中瘧	○	○	欠	欠	胎中瘧	○	胎中瘧	胎中瘧	○	○	○	○	胎中瘧	瘧疾	○	○	○	胎中瘧
附録	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
臨産	○	○	○	欠	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
附録	○	○	○	欠	○	以下見出し	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
攣胎	攣産	攣胎	○	○	○	欠，但し	○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
坐産	○	○	○	○	○	処方あり	○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
横産	○	○	○	○	○		○	欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
碍産	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
偏側	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	偏額	偏倒

産后	産後	産後	産後	産後	産後		○	産後	○	産后	○	○	○	産後	○	○	○	産后	産後
胞衣	胞衣不下	○	○	胞衣不下	胞衣不下		胞衣不下	欠	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下	不下	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下	胞衣不下
盤腸	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
陰脱	○	○	○	○	○		○	○	○	○	以下欠	○	○	○	○	○	陰胞	○	○
子宮脱	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	欠	○	○	○	○	○	○
血暈	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	産後血暈	○	○
傷産	○	○	○	○	○		○	水飲欠	○	○		○	小産	○	○	○	○	○	○
振慓	○	○	○	○	○		○	欠	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
瘀露	○	悪露	悪露	悪露	悪露		○	○	悪露	悪露		○	○	悪露	○	○	○	○	○
児枕痛心腹 痛腰痛 小腹痛	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	頭痛 ○	○	○	○	○	○
産後寒熱	○	○	○	○	○		○	感熱病	○	○		○	感熱病	○	○	○	○	○	○
驚悸怔忡	○	○	○	○	○	○	後出	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
産后不語	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	産後不言	○	○	○	○	○	○
産後耳鳴	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	以下欠
産後虚汗	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
産後中風	○	○	痙病 ○	○	○		○	痙病 ○	痙病 ○	○		痙病 ○	痙病 ○	○	○	○	○	○	
産後嘔吐	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	下利 ○	○	
痢疾	○	○	産後下利 ○	○	○		○	不利 ○	産後下利 ○	下痢 産後下痢		産後下利 ○	不利 ○	○	○	○	○	○	
水腫	○	○	子腫 産後水腫	○	○	○	○	○	産後水腫	○		産後水腫	○	○	見出欠	○	○	○	
女麹欠	欠	欠	欠	欠	欠		欠	欠	欠	欠		欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	
医按	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	見出欠	○	○	○	○	○	
頭痛	○	○	○	○	○	産後頭痛	○	○	○	○		産後頭痛	○	○	○	○	○	○	
産後咳嗽	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
崩血	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
帯下	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
褥労	○	○	○	○	○		○	○	○	○		産後褥労	○	○	○	○	○	○	
産後腸癰	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	褥労	○	○	○	○	
附録	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	欠	○	○	○	○	

注：宗田：宗田　一旧蔵．大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成　29　華岡青洲一．東京：名著出版；1980．p. 511–635
名古屋；近代医学の黎明デジタルアーカイブ．https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/book/1800hanaoka_sanka/index.html#page
産科叢書：増田知正，呉　秀三，富士川　游選集校正．日本産科叢書．東京：松崎留吉；1895．p. 957–969

表5　「産科瑣言」諸写本の「血量」の項に披見される処方名と味数＊

番号1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
沢蘭湯7	7	7	7	7	7	欠	7	6	7	以下味数欠	処方名欠	6	5	7	5	6	6	6	6
当皈地黄湯7	7	7	7	7	7	7	7	7	7			7	7	7	7	7	7	7	欠
弧鳳散2	3	3	3	3	3	3	3	3	3			3	3	3	3	3	3	3	3
妙香散9	9	9	9	9	9	9	9	8	9			砂高散9	9	9	7	9	9	9	9
補虚湯6	6	6	6	6	6	6	6	6	6			6	13	6	欠	6	6	6	6
芎皈保元湯8	8	8	10	8	8	10	8	10	9			10	欠	8	9	10	10	8	10
延胡索湯7	8	2	8	8	8	8	8	8	8			8	欠	8	8	8	8	8	8
人参当皈湯9	9	9	9	9	9	9	9	9	9			9	8	9	7	9	9	9	9
甘竹茄湯5	?	5	5	5	5	5	5	5	5			5	欠	5	5	5	5	5	5
三物黄芩湯3	3	3	3	3	3	欠	3	欠	3			欠	欠	3	欠	3	3	3	3
知母湯5	5	5	5	5	5	5	5	5	5			5	欠	5	5	5	5	5	5
増損四物湯？	6	5	6	6	6	6	6	6	6			6	欠	6	5	6	6	7	6
淡竹茄湯6	5	5	6	5	5	欠	5	欠	6			6	6	5	欠	6	6	5	6
蒲黄散1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1	1	1

注：処方名に続く数字は味数である．用量は省略した．
　　処方名が異なっている場合はそれを記した．

ものであって産科に関する記述はない．以下二十一種本『青洲医談』の「巻之一」，「巻之二」，「巻之四」から産科に関連した記述についてその要点を記す．各事項の冒頭の語句は原文による．

巻之一

24丁裏～27丁表　「産后諸症」

産后痙病　初起鰓よりダルクなり，言語塞渋，両手を握り反張．主方は小続命湯，葛根湯など証に従い用いる．合谷に鍼をして奇効を得ることがある．

産后痙病　胞衣が降らない内に発することがある．起居慎まなければ必発．

産后戦慄　軽易にするなかれ．5，6度発すれば戦慄が止んでも，諸症蜂起する．

産后痙病　ギクギクとして「手張フ者，口禁者」に対して左右の合谷，髪際に鍼を行えば治癒する．

産后戦慄　血気不和，邪気虚に乗じて致す．早めに荊芥沈香湯を与える．十補加荊炮姜湯の証もある．この処方は千金方に披見される．

産后小水自利　神経の循環せざるによる．参芪加附子湯を与える．

産后血熱　心胸に迫って痛む場合には失笑散を与える．実証の者には三泻，または柚実の霜が有効．蛔虫を兼ねる者は難治．

産后暴泻　二三行の場合は冒風湯が有効．十二，三行の者には効果が遅い．心下痞破の者は甘草泻心湯に変える．

産后血暈　早めに補虚湯加附子炮荊芥を用いれば治癒する．附子は一昼夜童便に浸下後乾燥して使用する．

産后ノ子宮腫　乱りに桃承，牡丹湯などの破血剤を使用してはならない．十補加銀花，あるいは益母草がよい．

産后暈倒　孤鳳散がよい．四肢厥冷し脈が沈伏する者は不治．

難産　腹を強く圧迫した場合には子宮に腫を生じることがある．

産后下血　出ない者（「止まらない者）の誤記）には鹿胎霜を白湯で服用する．

産后血虚　舌赤く爛れて痛む場合には八物湯加鹿霜が有効．

産后癇　沈香天歴湯を与える．

子宮脱ヲ入ル法　薄荷を湯に浸し子宮に当ててから手術を以て入れる.

巻之二

6丁裏

産后ノ崩漏　早めに手当をしないと命に係わる．早期に鹿胎霜を与える．鼬鼠の腸を去って紅花を摘めて霜と為して服用するのも効果がある.

9丁表

産后発癇　沈香天麻湯を与える.

産后ノ振慄　産后の保護を失すれば振慄を招く．十全大補湯加荊芥炮姜，荊芥沈香湯を用いる.

10丁表

産后ノ崩漏　鹿胎霜を用いて急難を救う.

血暈　先ず生味噌を用いる.

胞衣不下者　子宮不閉の故，必ず振慄を発する.

産后暈倒者　弧鳳散を与える．四肢厥冷沈伏者は不治.

11丁表－裏

産后戦慄　柴胡剤を用いるのは誤り．十全大補湯加荊附子を投与すべきで人参者附を用いれば発熱するが有効である．戦慄は痙病の初起.

18丁表

血暈　血暈は産后に限らず臨産にも発する.

27丁裏

臨産数日　瓜帯を与えて吐せしめること数度．無難に出産．安易に鈎をかけてはいけない.

34丁表

急癇ヲ治ス方　賀川氏方　黄連　辰砂等分

34丁裏

産后血暈失行暈倒者　五霊脂　鉄屑等分

臨産ノ時腸出者　賀川氏方　麦粉　芥子　野花　葱白　蕎麦　煎じて患所を蒸す

又洗薬方　葱白　蕎麦売　煎じて麻油を入れて煎じ患所に塗る.

36丁表

小産ト脱血ノ区別　ここでいう「小産」は流産のことで，この場合，葡萄実の潰れたような物が混じっている．単なる出血の場合は血の塊だけである.（賀川説）

42丁表－裏

難産ニヨル尿道破裂　早速治療してはならない．百日くらい経過してから缺唇のように治療する.

巻之四

8丁表－裏

痙病ノ初発　キクキクとして手を握り，口を噤む者は治す．早く，合谷，後髪際に鍼をすべし．葛根湯，十全大補湯加荊附子湯，または愈風散，荊茶酒煎．口を開き，角弓反張するものは不治.

11丁裏

産后小水自利　神経が順環しないために起こる．参者（芪）加附子湯を与える．奇方がある．鳶の腸を去って紅花をつめて焼いて末となし，酒で服用する.

13丁表

難産后の塊　子宮の腫れによる者では桃核承気湯を与えてはいけない．十全大補湯を与える.

13丁表－裏

産后血熱　心胸に迫って痛む者は失笑散を与える．実証の者には三黄色泻心湯，柚核霜が有効．蚘があれば難治.

「巻之一」は大きな見出しに「産后諸症」とあって，小さな見出しは引用したように16項目に上る．これらは「巻之二」の見出しの過半，「巻之四」の見出しのすべてと重複する．このことは「巻之一」，「巻之二」，「巻之四」はいずれも異なった時期における青洲の口述を筆録したものであること

を強く推測させる．短期間に産科について繰り返して口述したとは考えられないからである．もう一つ注目すべきは「巻之一」,「巻之二」,「巻之四」に共通するのは「産后諸症」である．このことは青洲が産科の中でも「産后」の合併症について重視してその対処法を教授したことを窺わせる．「巻之一」の「産后諸症」で記述されている16項目は一括して口述されたと見做され，項目間に断絶の形跡を見いだすことが出来ない．これらの殆どの内容を『産科瑣言』の後半の「産后」以降の記述に見いだすことが可能である．しかし，『青洲医談』の口述記録で示された処方は代表的なものだけに限定されている．

以上を考慮すると，青洲は教本ともいうべき資料を準備してそれに基づいて繰り返し口述したことが『青洲医談』によって推測される．現在のところ『産科瑣言』の稿本を含めて青洲が使用したと思われる教本の存在は確認されていない．

6. 廣田伝亮の『見聞録』中の産科関連の記述と回生術

筑前の廣田伝亮（号は金里，字は子泉，諱は泌）は『華岡青洲先生春林軒門人録』[21]によれば1819年（文政2）3月に入門した．在塾期間は知られていないが，1824年（文政7）末には帰郷したと考えられる．この間，1821年には師青洲に命じられて『続禁方録』の編集に携わっており，門人の中でもその人物，学力が認められていたことが知られる[22]．また1823年には塾事として塾則に名を連ねている[23]．彼が1822年（文政5）7月から1824年にかけて春林軒での臨床経験を記したのが『見聞録』である．現在廣田の『見聞録』の稿本の所在は不明で，東京医科大学附属図書館と大阪市史編纂所に所蔵されている2写本だけが知られているが，稿本に近いと思われる東京医科大学附属図書館所蔵本をここでは参考にした[24]．『見聞録』中に以下に示すように産科に関連する事項が記述されている．異体字を常用漢字に直した．また明らかに誤字，脱字と思われるものは（）内に正しい字を補った．

『見聞録』21丁表–22丁裏

回生術口授

先鈎之柄ヲ木綿或紙ニテ巻，一人後ヨリ婦人ヲ抱キ，動カサヽラシメテ，医前ニ蹲踞シ，患者ノ知ラサルヤウニ鈎を懐中ヨリ出シ，先鈎ヲ横ヘ陰門ノ上辺ヨリサシ入，内ニテ鈎尖ヲ起シヒツカケ，力ヲ極テ引出シヲキ，又陰門ノ横辺ヨリ鈎ヲ横ヘ，尖ヲ下ニ向テ胎ノ下ヘメクラシ，起シ引出ス，少シ胎出ル時ハ，鈎ヲ不用シテ手ニテ引出ス，鈎ヲ紙ニテ包ミ又々懐中スヘシ，引出ス間，右手ノ臂，彼蹲踞シタル右足ノ股ニ承引ヘシ，是最モ専要トスヘキ事ナリ，不然ハ誤テ鈎ハツレ大ニ陰門ヲ損傷スル事アリ，産后陰門破裂，小便失禁，或鎖陰トナル者，是皆多ク医ノ誤也，鈎をツカフ間，最早分娩スルニ因テ努力スヘシト言テ，産婦ヲ励スヘシ，煩苦ニ不堪時ハ暫ク引ク事ヲ止ムト雖，矢張鈎ノユルマサルヤウニ手ヲハナスヘカラス，不然ハ児胎又々引込也，引出ス寸ハ上辺ヘ向ケ引出ス意モチ（ツ）也，下辺ヘ引出ス寸ハ，肛門破裂スル事アリ，アキ（「ト」脱落，「アギト」は顎の意）ノ辺，ボンノクボノ辺ニ鈎をカケテヨシ，兎角冒卒ニスレハ必仕損スル故，徐々ニ行フベシ，

横産ニテ手ヲ出シタルモノ，無理ニ引ヘカラス，陰門中ヘ右出タル手ヲオシコミ入，胎ヲ指頭ニテヲシヤル寸ハ出ツ，又手腫テ入カタキモノハ，鈎尖ニテ膊ノ下辺付モトノ処ヲカキ破テ，肩髑ヘ指ヲ（ア）テヘシ折リ，而シテ出シカタキモノハ，児ノ腋下ヲ鈎ニテツキ破リ，臓腑ヲ引カケ出セハ，胎ハシボミ出，此術施シカタシ，懸テ出カタキハ児胎ヲ上ヘヲシアケル気味ニイタシ，後ロヨリ婦ノ肛門ヲ推（ス）時ハ，即出，若鈎ヲツカイ生胎ノモノナレハ，啼声ヲ不発サ（ト）キ，紙或手拭ニテ口ヲ塞クヘシ，鈎ノ痛傷不甚者ハ生ヲ全フスル事アリ，

坐産ハ手ヲ以テイレ足ヨリ引出スヘシ，手ノ大指ヲ掌ニ折コミ余ノ四指ヲスボメ陰中ヘヲシ入ベシ，不然ハ手難入，

胞衣不下モノハ，婦人ヲシテ坐セシメ，医前

ニ向（ヒ），両ノ肋辺ヨリ手ニテ撫ヨセ婦ノ右辺ヘヨリ，左手婦ノ肩ヘカケ右手ニテ婦ノ肛門ヘ向ケ推下ス意ニスヘシ，脂（指）頭ニ応シ下リタル寸，左手ト取替，右手ニテ胞衣ヲ引出スヘシ，右ノ術ニテ，即時ニ下リ手ヲサヘルニ不及者ハ勿論，下リテモ今一イキ出カタキ者ハ胞衣帯ヲ指ニマキ除（徐）々ニ引出スヘシ，手強ク引出ス時ハ切ル丶ナリ，胞衣ハスラ丶トシテ引難キユヘ，兼テ灰ヲ紙に包ミ懐中イタシヲキ取出シ胞帯ニ塗テ引出ス事肝要ナリ，

呉は『華岡青洲先生及其外科』の中で『産科瑣言』については書名以外に殆ど言及しておらず，産科に関連して「鈎による分娩」，「横産」，「坐産」の3項を廣田伝亮の『見聞録』』から引用するのみである[25]．呉が用いた『見聞録』の写本は題名が異なっているため数本の写本を用いた形跡があるが，それらを今直ちに特定することは困難である．呉は上の引用文のうち「胞衣不下モノハ」以下の文章を引用していない．

これらの事項に関して二十一種本の『産科瑣言』ではどのように記述されているかを見ると，鈎を使用しての分娩法については記述がなく，「攣胎」，「坐産」，「横産」，「碍産」，「偏側」について簡単に解説しているものの，手技についての説明はない．例えば「横産」について1番二十一種本では「先手ヲ（カ）出テ不動者ニハ手術口伝」とある．この「口伝」を記述したのが上掲の廣田の「横産ニテ……」の記述である．したがって『見聞録』は『産科瑣言』の一部の不備を補うものでもある．横産に対する手術は賀川玄悦の『産論』においても「是に茲の一術あり．微意ありて以て筆授し難し．然りと雖も余常に驟々（しばしば）此を用いて人の黄災を救う．挽回周全．殆ど千を以て数える．唯，弟子輩，また一，二これを継ぐ者ありとここにいう．」（原漢文）と記しているのみで，胎児を犠牲にして母体を救うと云う残酷な方法でもあったので，この事情を考慮して玄悦もその術式を詳細に記さなかったのであろう[26]．『産科瑣言』の「横産」と「偏側」では末尾に処方を示している．このことだけを見ても『産科瑣言』は一般の産科書でないことが理解されるであろう．なお『見聞録』中に『産科瑣言』の書名は披見されない．

7. 賀川流の「死胎八則」に対する青洲の見解

1番二十一種本『産科瑣言』の「臨産」の後半に「偖，賀川氏ニ死胎八則ト云事有」として胎児死亡に関することが述べられている．賀川流産科でいうところの死胎の兆候について青洲の見解を述べたものである．しかし，賀川玄悦の『産論』には数ヵ所に「子死也」とあるが，まとまめて「八則」とは記述されていない．賀川玄迪の『産論翼』には「死胎候法」の一節があるものの「二十五則」であって「八則」ではない[27]．『産翼論』の1856年の改訂版でも「死胎候法　二十五則」とあって初版の「二十五則」が踏襲されている[28]．「二十五則」の内，青洲が重要な所見「八則」を選んだのかも知れない．しかし，著者未見の文献に「八則」があるかも知れないので今後の課題である．青洲のいう「賀川ノ八則」とは箇条書きにして分かり易く示すと以下のようになる．但し，賀川の原文が知られておらず，この『産科瑣言』の記述にも不明瞭な箇所があることを了解していただきたい．なお青洲のいう1則，2則，7則については賀川の「二十五則」中に同主旨の記述を見いだすことは出来ない．

1則．破水して一，二日産まれなければ死胎
2則．出産時，暴（にわか）に出血するものは死胎
3則．臍帯が先に出る者，血胞帯が共に出る者は死胎
4則．破水が一斉に起こらず，少しずつ滴下し，脈が沈で遅の者は死胎
5則．横産，手を出して臂に及ばないもの十の五，六は死胎
6則．逆産で両足を露わして半日以上分娩しない者は死胎
7則．臨産前から数度出血の見られる場合は死胎

8則．腫大満気急迫するものは八，九は死胎

上記の1則，4則，5則，7則に関してそれぞれの条において「震曰」として青洲の見解を述べている．賀川の規則が必ずしも妥当ではないことを指摘したものである．それぞれを以下に示す．句読点は著者（松木）による．誤字は正しい字を（ ）内に補った．

1則：是斗リニテ死胎トハ餘リ云放シタル事ナリ．二，三日二シテ死胎ナキモ経歴セリ．是ハ其徴を見ルニハ，先舌色ニテ分カツヘシ．或舌色青ヒレカヽリ，又ハ黒胎（苔）ニ成ハ死胎也．仮令五，六日或十日破水者是生胎ナリ．是等ノ様ニ長ビク者アル故，兎角催生薬カ（ハ）急ニスヘカラス．前ニ云通，和気飲ノ加減法（方）宜シトス．

4則：活胎ナル者アリ．脉浮数弦，舌赤滑者ハ活胎ナリ．左ヨウノ者ハ陰中ニ手ヲ入探ルヘシ．胎児ノ頭ヘ手ヲサヘテ見レハ，分明ニ髣髴ノ間動気アル者ナリ．是活胎也．

5則：是モ今手ヲ出シタリト云時ハ活胎ナレ共，一日モ過レハ皆死胎ニナル也．又曰．臍帯与手斉（シク）出者ハ死胎也．

7則：総シテケ様ノ者ハ，臨産以前脱血スルハ其ニテハ居ラヌ者也．或寒慄発熱身重ク，舌ノウラヲ（「ヲ」不用）青クナリ，舌上黒胎（苔）ニナリ，或舌ノヒエル様ニ覚ル者ハ子母共ニ死スル者也．縦ヒ母ノ顔色帯赤色元気ヨケレ共，舌ハ青ヒレタルハ母ハ治シテモ胎ハ死スル也．又面色青ク唇ノ色無紅，舌ニ胎（苔）カヽリ，吐涎沫者ハ子母共ニ死スルナリ．偖又，母ノ死シテ子ノ活ナル者アリ，至テ希也．此症無異症，多其診様ヲ知ラハ子ヲ出シヤルヘシ．暫時コレヲ診按シ，子ノ居ノ住ノ処アタヽカナルハ活胎ナリ．大抵死スル者ハ膻中ノ辺早ク冷ル者ナリ．是ハ夫ニ反スルナリ．

賀川流の死胎の診断が不十分であることを指摘したものであり，この項の末尾に「先（ズ）是ニテ一通リ賀川ノ八則也．其中ヘ予カ見及フ処ヲ増補スルナリ」と結んでいる．これを読む限り青洲も相当数の分娩を取り扱った経験を持っていることが知られる．そのような経験がなければ，産前，分娩，産後の諸病状に対する賀川流の処方の使い方の不備を指摘出来ないであろう．なお「死胎」と診断すれば「6. 廣田伝亮の『見聞録』中の産科関連の記述と回生術」で述べた「回生術」を行って「死胎」を摘出することになる．

8. 青洲の処方と賀川玄悦の処方の違い

青洲は1番二十一種本の「産后」の項の冒頭に「産后，賀川氏ノ産論抔ニモ頻リニ折衝欠（飲）ヲ用ル事有レ共，大非成事也．術ニ於テハ先輩未発ノ事多ク，済生ノ術トモ云ツヘシ．其方ニ至テハ大ニ誤リアリ，治ヲ生（失）スル事少ナカラス．克（先）ニ窮理ニシテ（ノ）治術ヲ考ヘシ．何カ産后ニ瘀血熱ノ総シテ凝滞アル者抔ニ思レタリ．是ハ誤ノ始．」と述べて，先達がなし得なかった多くの手技を開発した賀川玄悦に敬意を表しながらも，その処方の使用法に関しては大いに誤っていると指摘しており，その一例として賀川流ではしばしば産後に「折衝飲」を投与することを例示している．

『産論』の「巻之三」に「凡そ，産後三日，必ず折衝飲を用いて，諸外症と虚実に拘わることなし．」（原漢文）と記述されている[29]．確かに産後の多くの病態で折衝飲が適応とされ処方されている．これに対して青洲は上掲の引用に続いて「吾門ニテ熱陽散ト名テ八物湯ヲ一切ニ用ユ．是ニ香附童便製黒焼餘薬モ炒ル（リ）為散薬用ユ．其功多シ．」と記している．

折衝飲は現在でも使用されている処方であるが，主として瘀血による症状の改善に用いられる．しかし，青洲は産後の諸症状は瘀血に原因するだけではなく，他の原因も考慮してそれを改善する必要があるとしてより広い適応の八物湯（四君子湯＋四物湯）の投与を選択すべきと考えた．四君子湯によって産後の衰えた消化器機能を回復して水分の停滞を改善し，四物湯によって産後の「血虚」の状態を改善することを目的にした．

もう少し例を挙げよう．産後の「寒戦咬牙」に対して『産論』は瘀血に原因するとして「折衝飲」を勧めるが[30]，青洲は「産后寒熱」と云っても区々の病態があるとして，それぞれに「増損四物湯」，「補虚湯番莎炮荊芥」，「四物加柴胡」，「小柴胡芋」，「八味逍遥散」，「五味麦門冬（地骨皮，地黄，荊芥）」など多種の処方を示している[31]．さらに一例を示そう．産後の「怔忡」（「癇」のこと）に対して『産論』は「八物湯」のみを処方するが[32]，『産科瑣言』はその多彩な原因と症状に応じて「茯神湯」，「遠志湯」（以上「千金方」から），「調経湯」，「琥珀湯」，「芎皈散加辰砂」，「七珍散」，「医皈脾湯」，「石昌酸棗仁湯」を使い分けるとしている[33]．漢方の処方の詳細を論ずることは著者の能力を遙かに超えたことであるのでこれ以上の言及は差し控えるが，青洲は多彩な病状に応じてそれぞれに至適な処方を投与しなければ「窮理ノ治術」ではないとしたことだけは理解出来るし，その点にこそ青洲の医術の真骨頂があると思う．

おわりに

『産科瑣言』は本間玄調の撰になる『春林軒二十一種』（4集）にも収載されており，華岡青洲の主著の一つである．本書は従来一般の産科書であるとされてきたが，これは誤った評価である．賀川玄悦の『産論』において論じられている産科の術に関しては古今未発の方法であると青洲は高く評価する一方で，玄悦が産後の種々の病態に一律に「折衝飲」を処方しているのは誤りであるとした．そして産前，分娩，産後の各時期における様々な合併症に対して症状に応じた適切な処方を投与すべきとして140方前後の処方を記したのが『産科瑣言』である．青洲の手になる稿本の存在は確認されておらず，管見では1824年に書写された写本が最も古い．異名同書は『胎産瑣言』一種である．閲覧した20本の写本間では特記する程の異同は認められない．今後は本書の成立年の特定と1824年より前に書写された写本の発見が焦点である．

稿を終えるに当たり，貴重な写本の閲覧に便宜を与えてくださった下記の方々に厚く感謝の意を表する．

個人：高橋　均博士．

施設：研医会図書館，公益財団法人武田科学振興材談杏雨書屋，千葉大学附属図書館亥鼻分館，内藤記念くすり博物館．

参考文献と注

1）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 443–444
2）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 381–387
3）松木明知．本間玄調による「春林軒二十一種」の選定―華岡青洲研究における本間玄調の貢献―．麻酔　2020；69: 1014–1023
4）松木明知．華岡青洲研究文献一覧．華岡青洲と「乳巖治験録」．弘前：松木明知；2004．p. 183–252
5）松木明知．仁井田好古による「華岡青洲墓誌銘」．華岡青洲研究の新展開．東京：真興交易（株）医書出版部；2013．p. 45–55
6）本間玄調撰．春林軒二十一種（四集）．武田科学振興財団杏雨書屋所蔵．請求番号3169-4．「痢疾瑣言」と合冊．
7）松木明知．浅田宗伯の「皇国名医伝」．華岡青洲研究の新展開．東京：真興交易（株）医書出版部；2013．p. 59–62
8）増田知正，呉　秀三，富士川 游選集校正．日本産科叢書．東京：松崎留吉；1895．p. 957–969
9）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 355–356
10）緒方正清．華岡随賢と助産学．日本産科学史．大阪：緒方正清；1919．p. 446–450
11）関場不二彦．西医学東漸史話．東京：吐鳳堂書店；1933．p. 280–292
12）梶　完次（藤井尚久校補）．明治前日本産婦人科史．日本学士院日本科学史刊行会編．明治前日本医学史．第4巻．東京：日本学術振興会；1964．p. 202
13）大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成．華岡青洲（一）．東京：名著出版；1980．p. 509–635
14）宗田　一．産科瑣言（解題）．大塚敬節，矢数道明編．近世漢方医学書集成．華岡青洲（一）．東京：名著出版；1980．p. 57–59
15）新日本古典籍総合データベース．https://kotenseki.nijl.ac.jp（2020年1月8日アクセス）
16）松木明知．華岡青洲の撰による「青嚢秘録」の書誌学的研究―とくに初期の写本と全身麻酔薬を中心として―．日本医史学雑誌　2019；65: 440–457
17）緒方正清．奥劣齋と助産学．日本産科学史．大阪：緒方正清；1919．p. 368–402

18）緒方正清．立野龍貞と助産学．日本産科学史．大阪：緒方正清；1919．p. 403–427
19）松木明知．華岡青洲の「瘍科瑣言」の成立と写本の系統に関する研究．日本医史学雑誌　2019；65: 279–300
20）松木明知．華岡青洲の「青洲医談」に関する研究―諸写本の書誌，成立，内容，異名同書についての考察―．日本医史学雑誌　2019；65: 19–42
21）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 508
22）松木明知．華岡青洲の撰による「続禁方録」に関する研究．日本医史学雑誌　2018；64: 281–297
23）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 437–443
24）管見によれば，本文でも記したように下記の 2 本が知られているのみである．
東京医科大学附属図書館　請求番号 古医書 715　60 丁
大阪市史編纂所中野文庫　請求番号 490 和 64　69 丁
25）呉　秀三．華岡青洲先生及其外科．東京：吐鳳堂書店；1923．p. 365–366
26）賀川玄悦．産論（考訂版）．1775（京都大学富士川文庫所蔵）　巻之二．12 丁表–裏
27）賀川玄迪．「産論翼」．1775．（京都大学富士川文庫所蔵）乾之巻．27 丁表–29 丁表
28）賀川玄迪．「産論翼」．1856．（京都大学富士川文庫所蔵）乾之巻．27 丁表–29 丁表
29）賀川玄悦．産論（考訂版）．1775（京都大学富士川文庫所蔵）巻之三．1 丁表–裏
30）賀川玄悦．産論（考訂版）．1775（京都大学富士川文庫所蔵）巻之三．5 丁裏
31）華岡青洲．産科瑣言．春林軒二十一種（四集）．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵　請求番号 杏 3169-4．38 丁表–38 丁裏
32）賀川玄悦．産論（考訂版）．1775（京都大学富士川文庫所蔵）巻之三．9 丁表–9 丁裏
33）華岡青洲．産科瑣言．春林軒二十一種（四集）．公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵　請求番号 杏 3169-4．38 丁裏–40 丁表

A Study on Seishu Hanaoka's *Sankasagen* and Its Contents

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Sankasagen is an obstetric textbook edited by Seishu Hanaoka. It is considered one of Hanaoka's most important writings, and previous studies did not clarify its detailed contents. I have meticulously investigated twenty copied manuscripts of *Sankasagen* and found that Hanaoka focused his descriptions on how to use herbal prescriptions before and after parturition. Accordingly, it is not a conventional textbook, but is a collection of about 140 herbal prescriptions in obstetrics. Hanaoka edited it to rectify Gen-etsu Kagawa's inadequate use of herbal prescriptions in his textbook *Sanron* (1765). I have also found that the earliest manuscript was copied in 1824. I could not find any remarkable differences among these twenty manuscripts in the contents except for two copies, which lack the latter half of the contents. The date of the original manuscript, an important issue, remains unknown.

Key words: Seishu Hanaoka, *Sankasagen*, Gen-etsu Kagawa, *Sanron*, herbal prescriptions